

【第四〇回大会公開講演】

亀甲の由来譚の二種

― 東アジアにおける亀の伝承の諸相 ―

林 晃 平

一 浦島太郎はなぜ亀に乗ったのか

浦島太郎にかかわる研究を多年続けてきて、幾多の問題が今も残されている。例えば浦島はなぜ亀に乗ったのだろうか。この問いに対する明確な答は今も見つかっていない。少なくとも千三百年以前の奈良時代には既にあったこの話の中で、浦島が亀に乗るのは、たかだか三百年足らずの江戸時代に過ぎない。今のところ確実な資料としては、尾張藩御墨奉行であった朝日文左衛門の『鵜飼籠中記』に見られる竹田からくり見物の記述である。正徳二（一七二二）年四月二十七日には次のようにある。

其後「本朝年代記」と云からくり台三つ出。浦嶋太郎釣をたれ、亀に乗り、仙界に至り而若くなり販り、玉手箱明け
俄に老て、七世の孫にあふ処也。 （『名古屋叢書統編』）

ここでは「本朝年代記」という演目に浦島太郎が登場する。三つのからくり台は三場面を示すのだろう。一つ目は浦島が亀を釣り上げ、その亀に乗って仙界（おそらくは蓬莱または龍宮）へ行

く。次の台はその仙界での生活、浦島は若返り、乙姫（亀姫または龍女）と暮し、玉手箱をもらって亀に乗り帰郷する。そして、三つ目は故郷で落胆して玉手箱を開けて急に年寄ってしまった、その後七世の孫と会うのである。つまり、海上、仙界、故郷という三つの台でからくりが演じられたと想像される。これは今日も残っている名古屋を中心とする東海地区の「浦島」のからくり人形からも推測される。亀に乗り、乙姫に会い、玉手箱をもらい、箱を開けて年寄る場面などが現在もある。特に箱を開ける場面は「面被り」といい、浦島の胸元から翁の面が飛び出して浦島の顔に被さり、一瞬にして白髪の老人となるからくりである。

ところで、亀に乗る前の浦島太郎はどういう方法で龍宮へ行ったのであろうか。いうまでもなく舟で行っていた。例えばこの少し前に刊行された元禄四年（一六九一）刊『浦嶋太郎物語』の本文で確認しておこう。

さて、女房、申けるは「あはれ、みづからを本国へ送りてたび候へかし。これにて捨てられ参らせば、わらはは、

いづくへ何となり候ふべき。もし見捨て給ひ候はば、海上にての物思ひも同じ事にてこそ候はめ」と、掻き口説き、また、さめざめと泣きければ、浦島太郎はもとより情け深き者なれば、あはれと思ひ「さらば、送りに参らせん」と同じ舟に乗り、沖の方へ漕ぎ出だす。〔第四回〕かの女房の教へに従ひて遙かの舟路を送りければ、いくほどもなく女房のふるさとへぞ着きにける。

（仮名を一部漢字に換え鍵括弧と句読点を適宜施す）
遭難した女を舟で送って行き、教えのままにたどり着いた所が龍宮であった。ゆえに龍宮とは海の底ではなく、舟で行った水平線の彼方にあった。それが所謂御伽草子の龍宮なのである。今日では亀に乗った人物の代表者に見られている浦島太郎だが、実は浦島以前に亀に乗った人は既に多数存在した。『日本書紀』卷第二（神代下・一書第三）では豊玉姫が玉依姫をつれて亀に乗ってやってくる、『古事記』中巻でも神武東征を導く槁根津日子が亀に乗っている。

また、仏教説話の中にも、命を助けられた亀が、恩返しとして人を背中に乗せて助ける亀の報恩説話がいくつかある。『日本霊異記』上・第七「亀の命を贖ひて放生し、現報を得て、亀に助けられし縁」、『今昔物語集』卷第九（震旦部）「 人、以父銭買取亀放河語第十三」、『打聞集』第二十一話「銭亀買人事」、「宇治拾遺物語」下末一（卷十三第四話）一六四「亀を買って放つ事」、『今昔物語集』卷第十九（本朝部）「亀、報百済僧弘济御

語第三十」などである。

さらには山陰中納言という歴史上の人物の説話も残っている。西国三十三所の観音霊場の第二十二番札所である総持寺を創建した藤原山陰の話は、『今昔物語集』卷第十九「亀、報山陰中納言恩語第廿九」を始め、『宝物集』卷下、卷五（九冊本巻七）、『十訓抄』卷一第五話、『長谷寺驗記』卷下第十三話、『源平盛衰記』卷二十六、『三国伝記』卷七第二十七、『沙石集』八上（版本）などであり、浦島が亀に乗る以前はむしろ山陰の方が名高かったであろう。こうした幾多の先人がいる中では、千年遅れの江戸時代に改めて亀に乗る必要は何もなかったのではないか。

二 亀に乗る猿と兎

人だけでなく動物も亀に乗っていた。江戸時代中期の赤本『猿のいきぎも』（東洋文庫）の表紙は、猿が亀に乗っている絵題簽である。これは亀にだまされて生き胆を取られるとも知らない猿が龍宮へと向かう場面とつながる。この話は昔話「亀甲の由来」とも呼ばれ、海月に注目すれば「海月骨なし」ともいわれる動物昔話の類型「57猿の生き肝」（『日本昔話通観』、以後「通観」と略称す）である。この赤本は昔話が書物として刊行され大衆化していく典型例といえる。『通観』研究篇2から話の概要を示しておく。

① 竜宮の乙姫の病気に猿の生き肝を薬にすることになり、亀が猿を連れくる使いにやられる。② 亀が、竜宮に招待したい、と猿をあざむいて背に乗せて連れてくると、

門番のくらげがうっかり本音を漏らす。③猿が、肝は木に掛けている、と言うので、亀は猿を地上へ連れもどす。④猿が亀の背に石をぶつけ、亀の甲羅にひびが入る。⑤くらは魚たちに叩きのめされ、骨なしになる。[K 961.1,K 544.A2312.1.A2367.1.2]

『通観』研究篇2・日本昔話と古典・四八二頁

この話は日本においても様々に展開している。『今昔物語集』巻第五「亀、為猿被謀語第廿五」、『沙石集』五本・八類話1（亀は「虬」となる）、『月庵醉醒記』中「禽獸之類（鳥獸）」などの説話集に見られる。また、江戸期の随筆にも『根南志具佐』五、『燕石雜志』四「獼猴（ざる）の生肝（なまきも）」、『松屋筆記』四・一六「三国同日之談」、同・六七・五四「猿歎虬不与肝」などに見られる周知の話であった。

一方、目を外に向ければ、これもいくつかの異伝がある。中国を中心とした異伝については立石展大氏に高論がある。筆者として新たに付け加えるようなこともないが、強いていえば北海道の伝承が本州以南とは大きく異なっていることである。猿と亀との組合せが、兎とトドまたは鯨になっているのである。『通観』1からモチーフ構成を引いておこう。

①私（兎）が海辺にいとどの背に跳ね乗ると、とどが沖のほうに私を連れて泳ぐので、理由を尋ねると、とどは兎の心臓を死にそうな海神の娘の薬にする、と答える。[B 210] もの言う動物。B 750 動物たちの気まぐれな習慣。C

420 タブー——秘密を口にすること。N 440 貴重な秘密を知る。W 193 強要。参照 B 291 使者としての動物。参照 K 961.1 猿の心臓で病気が治る。]

②私はどこに、本物の心臓を家に置いてきたから、連れ帰してくれば渡す、と言ひ、とどは陸地に向かつて泳ぐ。[J 670 他者に対して身を守るための深慮。J 1160 賢い弁論。J 1706 愚かな動物たち。J 1749 誰でも知っていることを知らない——いろいろ。J 2460 言葉どおりに従うこと。参照 N 544 魂を外に持っている主張して逃げる。]

③私は近づいた陸に飛び上がり、嘘を本気にしたとどを愚弄して、笑いながら山のほうへ跳ねて逃げる。[K 500 だまして死や危険から逃れる。X 900 嘘とほらについてのこっけいさ。]『通観』1 北海道（アイヌ民族）・一〇二二頁 例話としては「488 とどの生き肝」（北海道石狩・旭川市近文・女）と掲出されている。しかし、「猿の生き胆」に対応させるならば、胆を狙われるのは兎なのであるから「兎の生き胆」とでもあるべきであろうか。原題は「間抜けトド」という。

サンクマ、カン、カン、ラーピ、ラピット、海辺へ、サンクマ、カン、カン、ラーピ、ラピット、海の下へ下がった、サンクマ、カン、カン、ラーピ、ラピット、一匹のトド、上っていたので、サンクマ、カン、カン、ラーピ、ラピット、上に躍ねて乗った。[以下「サンクマ、カン、カン、ラーピ、ラピット」は省略]そのトド、沖へ走った。

「なぜ、どうするために、このように、沖へ連れて行く」「我れ尋ねたら、「海の神、海の神の娘、病気でもう死ぬばかり、ウサギの心臓持つて行き、食べさせたら、葉だから、よくなるであろうと、そこへ連れて、汝を連れて行くのだ」。それでこう言った。それならば、我が本物の心臓、家に置いてきた。心臓ない。ひとり遊びに、海辺へ下がって来たのだ。連れて、帰ってくれたならば、我が本物の心臓持つて、海の神の娘、我助けてやるのにな」言うと、トド神、向き変え、帰った。もう陸、もう近い、どんと陸に躍（は）ねた。「なんでそんなに、二つも心臓を、三つも心臓を、持っているのか。くされトド、トド、我れうそ言ったの、本気にして、送ったべ」、そのように、ウサギ言つて、笑いながら躍ね、躍ねながら山へ逃げた。（キナラブック・p107）

（『通観』1・1010～1011頁）

北海道には猿がいない。だから猿の代りに兎が登場してくるというだけではない。立石氏が指摘することくこの話は中国では「海洋型・沿海部型」と「山地型・内陸部型」に分けられ、「海洋型・沿海部型」では、狙われる動物が猿ではなく、白兎・鹿などになっているのである。アイヌの伝承は、本州とは切り離され、中国の海洋型・沿海部型と同じタイプなのである。類話として稚内の例（北海道宗谷・稚内市・女）も上げておこう。

あるとき、兎がよい天気の日に海岸に出て、とどの背中にとび上がって遊んでいると、とどは急に沖へ向かって泳ぎだ

し、「アDOIコロヘンケ（海亀）の妹が病気になる、兎の肝がきくというので兎を捜していた」と言う。兎が「よい薬になる肝は山に乾してきた」と言う、とどはがっかりして浜にひき返す。兎はとどの背中から陸にとび降りて、「肝を二つも三つも持っているものがあるか」と言つて笑った。（アイヌ民話 p256 コタンⅡ p285）（『通観』1・1011頁）

次に隣り合う韓国の例を見よう。『通観』研究篇1では次のような例を挙げている。こちらは兎と亀の組み合わせである。

2 朝鮮 竜王の娘が病気になる、医者が「兎の肝を飲ませればよい」と言う。亀が名乗り出て兎を見つけに行き、背中に乗せてもどる途中でわけを話す。兎は「肝を忘れてきた」と言い、亀がもとの浜辺にもどると、草の中へ隠れてしまった。（朝鮮童話 p69） 崔 39

3 韓国・慶尚北道金泉市 2とは同じ。竜王が病気になる。兎は竜宮まで行き、竜王に「岩の上に置いてきた」と言う。（崔百選 p20）（『通観』研究篇1・五三五頁）

韓国にも現在野生の猿はいないが、韓国の昔話に猿は登場している。中国との関りを考えるべきであろう。兎は猿と同様に狡猾い動物として登場している。本州以南が仏典などの書物を介在する伝承に対して、文字を持たなかったアイヌには、韓国や中国の沿海部型の伝承が入ってきたと見てよいのであろう。

東南アジアなど例は、フィリピンが猿と鰐、ベトナムが猿と蛸である。インドでは猿と魚の例が挙がっている。しかし、こ

うしたアイヌの伝承は、浦島が亀に乗ることには当然に繋がってこない。

三 亀を運ぶ鳥 亀甲の由来・その二

ところで、昔話の亀甲の由来を説く話にはもう一つの話型がある。亀が空から落ちて甲羅を割るという話である。「500亀の甲羅」である。これも『通観』研究篇1から引く。

①日照りで池が干上がり、亀が困っていると、二羽の鶴が亀に捧をくわえさせ、口をきくな、と注意して、捧をくわえて他の池へ向けて飛びたつ。②地上の子供たちがその光景を見てはやしたてると、亀は腹をたてて口をきき、地上に落ちる。③亀の甲羅のひびは、このときできたものだ。

〔通観〕研究篇1・四九四頁

二羽の鳥が亀の願いを聞いて亀を運ぶ。しかし、飛んでいる途中で亀は口を開いてしまい、落ちて甲羅を割ってしまう。地域による異伝はたくさんある。東南アジアの話は以下の通り。

1 台湾 鶴が「靈霄殿に連れて行ってやる」と言つて

亀を背に乗せて飛び上がると、子供が亀の甲羅に玉を打ち、亀は煙突に落ちる。鶴がまた誘いにくると、亀は「空へ上がるより煙を食べたほうがよい」と答えた。(台湾 p.163)

2 タイ 親がおしゃべりな娘を島に置き去りにすると、娘は驚の夫婦に頼み、ぶら下がった棒の両端をくわえさせて運んでもらう。娘が夫婦に「夫が私を誘惑して

いる」「妻はねたみ深い」と言うと、夫婦は怒って棒を放し、娘は海に落ちて魚の餌になる。漁師が娘の骨を拾うと、船の人々が口論するようになり、骨を粉にして墓に埋める。粉を入れた酒を飲むと、人々はしゃべったり嘘をついたりするようになった。(タイ p.145)

3 インド、パンジャブ 亀が野鴨に頼み、自分のくわえた棒の両端をくわえさせて飛んでもらおうとすると、野鴨は「口を開くな」と言つて飛び上がる。人々がそれを見て、「すばらしい案だ」とほめると、亀は「ぼくの考えだ」と言つて地面に落ち、死んだ。(パンジャブ p.191)

〔通観〕研究篇1・四九四～四九五頁

また、次のような「589亀の天昇り」という異伝もある。

①三匹の亀が昇天する竜に頼み、先頭の亀がその尾に食いつき、数珠つなぎになって天へ向かう。②途中で竜が亀の安否をたかすと、亀は返事をして元の池に落ちる。

〔通観〕研究篇1・五四二頁

ところで、この話は、日本の説話集では古くから『今昔物語集』巻第五「亀、不信鶴教、落地破甲語第廿四」として知られているが、近年になって初めて注釈付で刊行された『注好選』（新日本古典文学大系31・一九九七）にも収録されていることで知られているし、『ギリシタン版エソポ物語』四八七「亀と、驚の事」にもあることが知られ、この話が一方では西洋にも広がっていることが知られる。その起源としてはインドの仏書と考えられており、

『パンチャタントラ』一・二三「亀と二羽の白鳥」を原文摘要を基に関りの深い部分のみかいつまんで引いておく。

ある池にカンブグリーヴァという亀がいて、仲のよい友達
の二羽の白鳥がいた。(略) ある時雨が降らなかつたために、
池は次第に乾燥した。そこでこの不運に苦しんだ二羽の白鳥
が亀に言った。「ねえ君、この池は泥だけしか残っていない。
君は一体どうなるんだ。僕たちの心は不安でいっぱいだよ」。
これを聞いてカンブグリーヴァが言った。「ああ、水がなく
ては、もう生きていられないよ。だがなにか方法を考えなく
てはいけない。(略) それ故なにか堅い綱か軽い木片をもつ
てきて、沢山の水を湛えた池を探してくれ給え。私はその木
片の真中を歯でくわえているから、君たちはその木片の先端
の部分をつかまえて、私と一緒にその池に運んでくれ給え」。
二羽の白鳥は言った。「よし、その通りにしてやろう。だが、
君は沈黙の戒を守らねばならぬ。さもないと君は木片から落
ちてしまうからな」。その通りに事が運んでいった時、(略)
町の人々は(略)「やあ、車輪みたいなものが、二羽の鳥に
運ばれているぞ、見てごらん、見てごらん。彼らの叫び声
を聞くと、カンブグリーヴァは言った。「何でそんなにわめ
くのだ」と、言いつつ言葉半ばで落ち、そして町の人々に粉
砕された。

〔通観〕研究篇2・四四九頁

こちらの話は、古代のインドの『ジャータカ』二二五「カメ前
生物語」、『ヒトローパデーシャ』四挿話一、『カリラとディムナ』

一「亀と二羽の家鴨」など、また經典の『旧雜譬喻經』下三九
〔法苑珠林〕四六・思愍篇、愍過部五、〔五分律〕二五〔法苑珠
林〕八二・六度篇、忍辱部三・引証部四に見られるだけでなく、
西洋にも『イソップ寓話集』三五一「亀と鷺」、ラ・フォンテーヌ
『寓話』一〇・二「カメと二羽のカメ」などにも見えている(『通観』
研究篇2・四四九〜四五〇頁)。

こうした書物を列挙して話の伝承を考えることは、直接書物か
ら書物へという書き継がれた書承のみを意味するだけのものでは
ない。語られた話が、たまたま書物に書き留められたにすぎない
とも理解することも可能である。伝承は口頭でも、文字としても、
多様にいくども繰り返されたことであろう。

ところで、この話の伝承に関して興味深い一つの資料がある。
筆者が亀の資料を求めてを韓国訪れた時に、ソウル市内の骨董街
で求めたものである。亀を探しているという問いかけに応えて店



図1：亀を銜えた二羽の雁

の奥から出されてきた額
装の絵である。一目、昔話
「亀甲の由来」として知ら
れる話を絵画化したもの
と思われるので購ったも
のである(図1)。残念な
がら、いつ、だが、どこ
で描いたものかはわから
ないため、資料的価値も

未定である。しかし昔話がことば以外でも伝承される可能性を示唆しているのではないだろうか。今のところこれと同様な絵があることを聞かない。しかし、絵画ではないが、基となる仏教説話のイメージ化については、インドや東南アジアにはレリーフなどの彫刻されている例は既にある。また、貝塚市の願泉寺本堂の欄間にはこの話を描いた木造彫刻が存する〔図2〕。まだ認識されないだけでイメージでの伝承の例は他にもあるのかもしれない。

口頭伝承を考える時、こうした絵の存在をどうとらえたらよいのであろうか。ことばを飛び越えてイメージが直接に伝承されていくこと。これにも留意する必要がある。話を聞く対象者が未見のものでも、絵に描くことにより、それを伝達することは可能である。描かれた絵は、視覚イメージとなつて、そのまま明瞭な形をもつて受け継がれていくのではないだろうか。

四 海彼の乗亀譚

ところで昔話ばかりではない。改めて注目すれば海の向こうにも亀に乗る説話は多い。著名なのは中国の燕丹と毛宝であらう。



図2：願泉寺欄間彫刻

う。毛宝は『蒙求』に「毛宝白亀」（二六二）とある。

初寶在武昌、軍人有於市買得一白龜、長四五寸養之。漸大放諸江中。郗城之敗、養龜人被鎧持刀、自投於水中如覺墮一石上。視之乃先所養白龜。長五六尺。送至東岸、遂得免焉。

（新釈漢文大系『蒙求』下・明治書院・一九七三年）
市中で四、五寸の大きさの白亀を買って飼育する者軍人がいたが、大きくなったので亀を揚子江に放した。郗城の戦いに敗れ、その軍人も鎧をつけ刀を持ったまま水中に飛びこんだところ、一つの石の上に落ちたように思われたが、よく見ると以前飼っていたて放してやった白亀で、五、六尺に成長していた。彼はこの亀に送られて東岸に着き、遂に死を免れ得た、という。

『蒙求』は幼学書として盛んに読まれていたことから、この話は日本でも学問の基層として普及していたであろう。『和漢朗詠集』下の源順の詩句にも「毛宝亀帰寒浪底」（白）胸句）とあり、『源平盛衰記』巻二十六にも「如無僧都烏帽子同母放亀、附毛宝放亀事」として、如無僧都という山陰の息子の逸話を記すのに付して、毛宝の逸話にも言及している。『蒙求』の話とは少し異なるが以下のようにある。

昔齊国に毛宝と云者在き。江の辺を通けり。漁父亀を捕て殺さんとす。甲の長さ四尺。毛宝是を憐で、買取て江に放つ。後に石虎將軍と云者と戦けるが、江の耳まで被責付て、毛宝難遁敵にとられて恥を見んよりは、不如江の中に入水にしづんで死なんにはと思ひて即入にけり。水の底に是を戴て我を

助る者あり。向の岸に至て江の中を顧れば、大なる亀也。亀水の上に浮て腹を頸にせり。是を見れば、毛宝が放せし亀也と云銘文ありて、其後水に入にけり。毛宝亀に被助て石虎將軍が難を免れたり。漢家本朝境異なれ共、放生の酬とりく也。

(内閣文庫蔵慶長古活字本・国民文庫)

この『和漢朗詠集』の同じ題「白」で順の詩句の直前には謝観「白賦」が掲載されて「燕丹之去日烏頭」(燕丹が去さりし日の烏の頭)の句がある。馬に角が生え、白い頭の烏が出現するという異変により燕の皇太子の丹は故国に帰ることを得るのである。しかし、その道中では秦の皇帝の策略により、丹は橋の途中で川に落ちてしまうが、亀が浮かび出て助けるのである。この逸話は『平家物語』巻第五「咸陽宮」の中にも見られる。

始皇帝、烏頭馬角の變におどろき、綸言かへらざる事を信じて、太子丹をなだめつゝ、本國へこそかへされけれ。始皇なをくやしみて、秦の國と燕の國のさか井に楚國といふ國あり。大なる河ながれたり。かの河にわたせる橋をば楚國の橋といへり。始皇官軍をつかはして、燕丹がわたる時、河なかの橋をふまばおつる様にしたゝめて、燕丹をわたらせけるに、なじかはおちいらざるべき。河なかへおち入ぬ。されどもち(ツ)とも水にもおほれず、平地を行ごとくして、むかへの岸へ付にけり。こはいかにとおもひてうしろをかへり見ければ、龜どもがいくらといふかずもしらず、水の上になうかれ來て、こうをならべてあゆませたりける。これも孝行のこゝろ

ざしを冥顯あはれみ給ふによ(ツ)てなり。(日本古典文学大系)

ここでは亀が群れを成して橋の代わりになったとする。同じ話が『源平盛衰記』巻第十七にも「始皇燕丹并咸陽宮事」として記されている。そして、この燕丹説話は後には古浄瑠璃『咸陽宮』、さらに草双紙『漢楊宮』としても受け継がれていく。そして、どちらにも浦島のごとくに一匹の大きな亀に乗った姿が挿絵として描かれているのである。亀に乗るというイメージは恰好の絵になるのであろう。燕丹説話は「燕丹乗亀」という画題として、日本でも狩野派の人々などによりよく画かれているようである(斎藤隆三『画題辞典』、金井紫雲『東洋画題綜覧』)。

隣国の韓国にも乗亀譚は古くからあった。たとえば、朱蒙の逃亡譚である。『三国史記』巻第十三「高句麗本紀」の冒頭に見られる。第一・始祖東明聖王・琉璃王として次のごとくにある。

始祖東明聖王の姓は高氏で名は朱蒙^{ジュモン}である(または鄒牟または衆解ともいう)。(中略)朱蒙が獲つた獣が非常に多かったので 王子および諸臣はまた朱蒙を殺そうとはかった。朱蒙の母はかげでこの事実を知り「国の人たちが まさに汝を殺そうとしている。汝の才能ならどこへ行つたていいではないか。ここにいつまでもとどまっていって害をうけるよりは 遠くへ行つて ことをはかった方がいい」と 告げた。朱蒙はすぐ烏伊 摩離 陝父ら三人で友となり 出發して、淹水(一名 蓋斯水 今の鴨緑江の東北にある)に至つて 川を渡ろうとしたが 橋がなかった。追手の兵が

追ってくるのを恐れ 川に向って「私は天帝の子であり河伯の外孫である。今 逃ける途中だが 追手がせまってくる。どうしたらいいだろうか」と たずねた。この時魚や亀たちが水の上に浮び出て 橋をかけてくれたので 朱蒙たちは川を渡ることができたが 魚や亀たちが解いて姿をかくすと 追手の兵は渡ることができなかった。 (『三

国史記』中、林英樹訳・三一書房・一一―一四頁)

亀が橋の替りになって人間を渡すという発想は、燕丹の故事に通じるものがある。この故事は『三国遺事』も同内容である。さらに付け加えれば、これは因幡の白兔にもつながる話である。

こうした海の向こうの説話が、話として日本にどの程度の影響を与えたのかはわからないが、先に見てきたように、乗亀譚の起源は仏教の本生譚(ジャータカ)まで遡りうることは確かである。そして、仏教説話を含めた彼我の説話の存在が、浦島が亀に乗るための環境整備に役に立ったことも確かであろう。

一方、視点を替えて見れば、江戸時代になったからこそ浦島は亀に乗ったのだともいえるのではないか。乗る必要のなかった浦島が乗るには、乗るための条件整備が必要だったのである。だからこそ乗って以降にはずっと亀に乗る話の方が優勢になってきているのであろう。千年という継続性の観点から考えれば、乗亀譚への転換は話の内なるダイナミズムではなく、外的要因によるものであると見る方がよい。つまり内的必然ではなく、外的な要因が浦島を亀に載せたのだと考えるのである。それを

筆者は「蓑亀」という神聖で異形な亀の登場であると捉えている。この亀の素性は詳らかではない。しかし、江戸前期から流行したことは、この時期の絵画彫刻に見られる通りである。そして、何よりもこの江戸前期以降、浦島乗亀図(浦島の亀に乗る姿)に描かれた亀は例外なくこの蓑亀なのである。

五 蓑亀はどこから来たのか

人間だけでなく亀に乗った姿の神々も多数描かれている。多くは浦島が亀に乗って以降のことと思われる。安曇磯良の亀に乗る絵も、御伽草子類に描かれるものは蓑亀である。これは磯良と豊玉姫とのつながりからであろう。また、伊豆御前崎駒形神社の風折烏帽子に直衣指貫姿の駒形大神の像も祭神に豊玉姫・玉依姫を祀る縁からであろうと考えられる。江戸時代以降に描かれたものは蓑亀として描かれている。水神である罔象女(ミズハノメ)命の掛幅を始め、奥州の「鹽竈三座大明神」(木版・法蓮寺)、丹後



図3：浦島五社明神像

の「浦嶋五社大明神」(木版・来迎寺)(図3)、そして神奈川の浦島寺の三尊像とその掛幅「龍宮伝来厄除聖観世音菩薩」(木



図4：浮木庵蔵「絵本初心柱立」の蓑亀

版・観福寺)にも脇士「浦島大明神」、「龜化龍女神」も含めその亀の姿はすべて蓑亀なのである。

先の赤本の乗亀図の亀までもである。

蓑亀の特徴を端的にあげておこう。頭頂部には耳が、口には牙がある。首は長くて蛇腹である。四足には爪があり、甲羅の後部には房状の尾のような藻が長く靡いて繁茂していることである。この異形の亀は『絵本初心柱立』(図4)でも海老や石亀や鼈などと並んで描かれているように、普通に実在するがごとき存在だったのだろうか。

また、草双紙類、錦絵、引札などの絵画や彫刻の類も含め、浦島乗亀図の成立以降、近代の絵本に至るまで、乗亀図に描かれた亀は、決して海亀ではなく、すべて蓑毛を持つ蓑亀である。ゆえに結果論として蓑亀の流行が浦島を亀に載せたという見方ができるのである。

この蓑亀は、いつごろどこから来たのであろうか。確実にわ



図5：伊達開拓記念館蔵「洛中洛外図」の暖簾の蓑亀

『日本誌』の中で次のように記している。

亀の一種に、学者の間では毛亀(もうき Mooki)、一般には蓑亀(みのがめ Mino game)と呼ばれるもので、甲羅の周りに円く髯が生えたように、幅の広い尾のある亀がいる。自然界には余り見かけないが、寓意的な幸福の象徴として、寺院や祠堂や諸侯の館の広間などの置物を初め、全国的に絵や飾り物に見かけられるものである。(今井正訳・上巻・一八五頁・改訂増補版・一九八九年、電ケ関出版)

学者は「毛亀」、一般には「蓑亀」と呼ぶ亀は、ケンペルの注意を引いた。彼は精確に蓑亀の特徴をとらえている。蓑毛は甲羅の上ではなく、甲羅の周りと甲羅の後尾に尻尾のようにある。ゆえに「幅広い尾」ととらえ、蓑亀を幸福の象徴と受け取った。つ

まり蓑亀は吉祥なのである。それゆえ行く先々の神社仏閣や大名の屋敷の広間などに置物として目につき、また全国的にも見かけたのである。それほどに当時流行していたことが『日本誌』の記述から、蓑亀が元禄頃（一六八八―一七〇四）には神社などを始め流行し、その規模は全国に広がっていたことが知られる。それは浦島が亀に乗った時期とも重なる。そして、蓑亀はその後もその性格を微妙に替えながら展開していくのである。

ところで、この乗亀図を支える異形の蓑亀は日本独自のものであったのだろうか。中国の仙人たちも亀に乗った姿が絵画や籠時代に描かれている。例えば「八仙図」の曹国舅は亀に乗る（メトロポリタン美術館蔵）。が、亀は蓑亀ではない。既に平安時代には大江匡房の『本朝神仙伝』に掲載されているように浦島も仙人としての認識はあったが、蓑亀の出現はなかった時点では乗ってはいない。しかし、日本においても江戸時代には蓑亀の流行と同じ江戸時代前期には亀に乗る仙人が寺社の墓又の彫刻として描かれていく。例を挙げれば、京都市内の北野天満宮拝殿、京都御所建礼門、二条城二の丸御殿唐門、下御霊神社の表門（仮御所建礼門を移築）などがあり、仙台市の大崎八幡宮拝殿の欄間彫刻にも見られる。

一方、海彼の韓国の民画のいくつかには亀に乗る仙女たちが描かれているものがある。その中には頭部には耳がり、甲羅の後部には蓑毛らしきものが描かれているものもある。ゆえに蓑亀の源流をここに求めることは可能だろうか。残念ながらこの民画の亀の

成立をどこまで遡らせることができるかが問題となる。仮に浦島の乗亀の時期を一七〇〇年以前としても、韓国の民画には落款もないため絵師の特定も制作年代も未詳といわざるをえない。つまり、制作年代がはっきりしない限り影響関係も問えないのである。

ただし、韓国の亀が日本に影響を与えていることは、間違いないだろう。例えば民画で好んで描かれる吉祥図に「十長生図」があるが、そこに描かれている亀は必ず口から息を吐いているように描かれている。これは絵画だけでなく、箸袋などの刺繍においても同じである。そして、日本でも江戸時代後期になると息を吐く亀が描かれ始めている。そして、生け花の薄端花器に亀が息を吐くイメージの造形あることから確実に届いているといえる。具体的には、未生斎一甫『插花さくらの香』（文政四年刊・『未生斎上田広甫全集』所収）などに見られ、その亀が蓑亀である例も遠野市の柳翁宿の床の間で実見している。

因みに、近世における蓑亀のイメージは単なる吉祥だけでなく万能であった。神々を乗せるだけでなく、蓬萊山を背負って絵にも描かれ、祝言の蓬萊（蓬萊山）または島台の作り物となっている。これについてもケンペルは絵を載せている。また、江戸末期には蓑亀はその口から龍宮の蜃気楼を替わって吐き出すとも考えられていたようだ。幕末から明治にかけては引札類には、それが描かれているものがいくつも⁸⁾ある。

もう一つこの蓑亀が広がった理由としては、ケンペルには言及はないが亀趺の存在がある。亀趺とは石碑の台座が亀

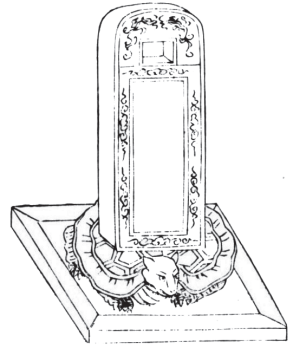


図6：『訓蒙図彙』の石碑の挿絵

の形をしているものの呼称であるが、中国では漢代、韓国では統一新羅時代には存在したのに対して、日本では大いに遅れ江戸時代前期頃から顕在化してくる。寛

永の頃にいたって登場してくる亀趺と呼ばれる亀の台座は、当初は蓑亀ではなかったようであるが、中頃の正保頃から蓑亀となってきたおり、寛文六年刊行の『訓蒙図彙』の「石碑」（卷之十一・器用）の挿絵（図6）（勉誠社複製本）では、蓑亀として描かれており、正徳二年『和漢三才図会』の「碑」（巻第十九・神祭附属仏供器）でもこの絵を踏襲している。

まとめ

『遠野物語』の「拾遺」の一五六に次のような話がある。

佐々木君の友人某という人が、ある時大病で息を引き取った時のことである。絵にある竜宮のような門が見えるので、大急ぎで走って行くと、門番らしい人がいて、どうしてもその内に入れてくれない。するとそこへつい近所の某という女を乗せた車が、非常な勢いで走って来て、門を通り抜けて行ってしまった。くやしがつて見ているところを、皆

の者に呼び返されて蘇生した。後で聞くと、車に乗って通った女は、その時刻に死んだのであったという。

（角川文庫版・一三三頁）

この「絵にある竜宮のような門」という表現が私には気になっている。この門が、あの世とか冥土の入口を象徴していることはわかる。しかし、語りの中で「絵にある」という表現を用いれば、ことばでの説明を放棄していることになりはしまい。あるいは「絵にある」ということば以外のものを比喩的に使ってはじめて龍宮門は理解可能となるのだろうか。いや、既に龍宮門は絵以外では表現できない異形の門として定着していたのであろう。⁽¹⁰⁾

続けて一五七にも同様な表現がある。別の友人が（病気で発熱するとよく幻覚を見るらしいのであるが）子供の時に鍋倉山の坂道を駆け下る際に転んで気絶した時に、倒れたと思うと「絵にある龍宮のような綺麗な処が遠くに見えた」とある（同書同頁）。これにもことばの代わりに「絵」が出てくるのである。こうした表現は、異郷イメージが絵という視覚イメージで伝承されてきたことを示唆すると共に、伝承という出来事が、ことばとともに、視覚を媒介としてもものでもありうることを示しているのではないかと思われるのである。

龍宮門で例を挙げる。石巻市の石応禪寺の龍宮門は、先代住職が東京上野の不忍池にある寛永寺弁天堂の門を見て、思い立ったものと聞いている。日光市興雲律院の門を参考にして宇都宮市の光明寺の門は出来たと聞いている。また、鳥取市の梅翁院が龍宮

門を建立の後、近隣の本願寺と光明寺、遠く離れて米子市の法城寺の門が建立されたという例もある。以上は私の聞き書きである。ことばと同じようにイメーシ（形）も伝播していくのであろう。かたちを視覚的に伝えていく伝承の方法がある、これを端的に目の伝承とも呼ぶことができると考えている。

付記

本稿は、日本口承文芸学会第四〇回大会（二〇一六年六月四日・於北海道大学）において「亀甲の由来譚の二種」と題して行った講演の素稿を基に、その一部を論文として成稿したものである。前後にご意見をたまわった各位に感謝する。

また、亀趺に関する調査と考察は、科学研究費助成事業（課題番号24520229「図像と文学形成の関連についての基礎的研究 伝承をビジュアルターンの視点で見直す」）の成果の一部であることを明記する。

注

- (1) 「浦島」のからくりを持つ山車は愛知県に大山市、半田市、碧南市などに三台現存し、現存の人形戯には差異もあるが、基本的に同じである。拙著『浦島伝説の研究』（おうふう・二〇〇一）第四章付節「祭礼の中の浦島伝説」参照。
- (2) 詳細は拙著『浦島伝説の研究』第四章第一節「浦島乗亀譚の周辺」参照。

- (3) 『日中間説話の比較研究』（汲古書院・二〇一三）第一章「猿の生き肝」の比較研究」参照。

- (4) この絵については拙稿「枝を銜えた亀のゆくへ」（『苦小牧駒澤大学紀要』二三号・二〇一一）を参照。

- (5) 詳細は『浦島伝説の研究』第四章第三節「浦島乗亀譚の生成」参照。

- (6) 『韓国の民話と伝説』一・古代編には「すすきの穂と兎」という話が掲載されている（朴榮濬編集・韓国文化図書出版社編集部翻訳・一九七五・二〇六―二〇七頁）。麗水（ヨウス）港の辺りに住んでいた兎が亀をだまして梧桐島（オドンド）に渡るといふもので、因幡の白兎によく似た話であるが、崔仁鶴『韓国昔話の研究』など他の文献での確認は取れない。

- (7) 『浦島伝説の研究』第四章第二節「蓑亀の登場」及び、拙稿「亀のリアリズム」（『人形玩具研究』一九・二〇〇九）参照。

- (8) 蜃気楼を含む江戸期における蓑亀のイメージの変遷については拙稿「蜃気楼と浦島太郎」（『苦小牧駒澤大学紀要』二〇号・二〇〇九）を参照。

- (9) 亀趺の概要については拙稿「亀趺の生成と展開」（『苦小牧駒澤大学紀要』二八号・二〇一四）及び「日本における亀趺の類型覚書」（『苦小牧駒澤大学紀要』二九号・二〇一四）を参照。

- (10) 龍宮門の成立に関しては拙稿「龍宮のイメージの形成」（『苦小牧駒澤大学紀要』八号・二〇〇二）を参照。

（はやし・こうへい／苦小牧駒澤大学）